

令和2年度第1回仙台市認知症対策推進会議 議事録

開催日時：令和2年8月31日（月）18時30分～20時00分

開催場所：上杉分庁舎 12階 第1会議室

【委員（五十音順・敬称略）】

（出席者）

赤間 恵美子（公益社団法人宮城県看護協会）
芦名 洋美（仙台市地域包括支援センター連絡協議会）
阿部 哲也（認知症介護研究・研修仙台センター）
伊藤 あおい（特定非営利活動法人宮城県認知症グループホーム協議会）
岩渕 徳光（社会福祉法人仙台市社会福祉協議会）
大嶽 友和（仙台弁護士会）
黒井 里美（特定非営利活動法人宮城県ケアマネジャー協会）
小牧 健一朗（一般社団法人仙台歯科医師会）
佐々木 薫（認知症介護指導者ネットワーク仙台）
鈴木 佐和子（宮城県老人保健施設連絡協議会）
清治 邦章（一般社団法人仙台市医師会）
高橋 将喜（一般社団法人仙台市薬剤師会）
丹野 智文（おれんじドア）
福井 大輔（みやぎ小規模多機能型居宅介護連絡会）
戸次 有一（仙台市老人福祉施設協議会）
南 研二（宮城県精神保健福祉士協会）
山崎 英樹（仙台市認知症疾患医療センター いずみの杜診療所）
若生 栄子（公益社団法人認知症の人と家族の会宮城県支部）

（欠席者）

原 敬造（一般社団法人仙台市医師会）

【事務局】

仙台市健康福祉局
各区保健福祉センター障害高齢課

【オブザーバー（順不同・敬称略）】

仙台市認知症疾患医療センター
いずみの杜診療所 地域連携室 川井 丈弘
仙台西多賀病院 医師 大泉 英樹
東北医科薬科大学病院 医師 古川 勝敏

東北福祉大学せんだんホスピタル 認知症相談室 石黒 亨
仙台市健康福祉事業団介護研修室
宮城県保健福祉部長寿社会政策課

【会議概要】

- 1 開会
- 2 挨拶（健康福祉局保険高齢部長）
- 3 出席者紹介

議事に入る前に、山崎議長より次の確認があり、委員より異議なく了承された。

- ・会議の公開・非公開の確認について、次第 5 報告「仙台市認知症疾患医療センター事業について」は、仙台市情報公開条例第 7 条第 1 項第 5 号「率直な意見の交換若しくは意思決定の中立性が不当に損なわれるおそれ、不当に市民の間に混乱を生じさせるおそれ又は特定の者に不当に利益を与え若しくは不利益を及ぼすおそれがあるもの」に該当するため非公開とし、その他を公開とすること。
- ・議事録署名人については、岩渕委員とすること。

4 議事

- (1) 令和元年度仙台市認知症対策事業の実績【資料 1】
- (2) 令和 2 年度仙台市認知症対策 主な取組み【資料 2】
(事務局より資料 1 および 2 について説明がある)

(山崎議長)

事務局からの説明について、質問・意見等をいただきたい。

ピアサポートの説明があったが、内容について丹野委員から補足をいただきたい。

(丹野委員)

現在、ピアサポートを月に四回ほどいずみの杜診療所でやっており、認知症当事者が 5 人ほど関わっている。診断されてすぐに、または診察を待っている間に、元気な当事者と不安を持った当事者が会おうという取組みを行っている。実際に、認知症と診断されて最初は下を向いて暗い顔をしていた人が、本人同士で話をして、笑顔で帰ることが多い。薬などではなく、エンパワーメントを高めることで家族も当事者も元気になるということをやっている。皆さん、ピアサポートについて勘違いしているところがあり、ピアカウンセリングだと思っている人が多い。なんとか当事者の言葉を聞き出そう、聞き出そうとしている。私たちがやっているのはピアサポートなので、当事者の経験をしゃべるだけ。それを本人が聞くことで、共感して凄く元気になるという活動である。その他に、運転免許を考える集いを同じくいずみの杜診療所でやっており、運転をやめた当事者とやめてない当事者がとことんまで話し合う。家族が言っても絶対にやめないが、

本人同士だと、自分で納得してやめるようになる。本人同士でしゃべるということが、凄く大切だということに気付いている。

(山崎議長)

出席の委員から、意見等はあるか。

(若生委員)

認知症の人と家族の会では相談事業もやっており、本人や家族から困難事例や早期の相談等がある。以前、私どもで受けた相談を初期集中支援チームに繋いだことがあった。そして、つないだ後に連絡がなく、ずっと心配をしている。詳細は要らないにせよ、どこでどのように関わったか、あるいは継続しているのか、連絡がほしい。一言でいいので、繋いだら返していただきたいという思いがある。

(事務局)

連携を行う上で、大事なのは情報共有や連絡かと思う。ご指摘を受け、情報共有について力を入れていきたい。

(山崎議長)

さらにないか。

(若生委員)

認知症対応力向上研修の実施で、歯科医師や薬剤師、看護職員であったり、様々な方面で研修をしていただくのはありがたい。ここにひとつ、認知症の当事者に直接関わる検査技師についてはどうか。例えば、私達のところに来ている本人や家族で、検査に対して抵抗があったり、上手く説明が理解できずに検査が受けられないといったことがある。そういった場合に、検査技師から「もういいです。もうやめましょう。」といった言葉をもたらすことがある。その時に、どのような声掛けで本人が検査に臨めるのか、検査技師のスキルアップを研修に入れていただけるとありがたい。せつかくの検査の機会をみすみす逃す、あるいは受けないことで、認知症以外の病気に繋がって困難が起きることを避けたく、提案したい。

(事務局)

医療・介護を含めて認知症に関わる方々の対応力を向上させていくことは大事かと考える。現在実施している認知症対応力向上研修は、対象の職種をある程度定めているが、場合によっては広い対象に行う研修も含まれている。幅広く関係する職種に対して案内することも検討したい。

(山崎議長)

薬剤師会では認知症対応力向上にかなり力を入れているが、いかがか。

(高橋委員)

薬剤師会では、会員の多くが仙台市認知症の人の見守りネットワーク事業に参加している。度々検索協力依頼メールの配信を受けるが、不明者の姿・格好、それが分かるような写真をカラーと一緒に添付していただきたい。プライバシーの問題もあるので、顔は写さなくていいが、大体の格好や着ているものがわかれば、凄く探しやすいという意

見がある。メールに文字での記載はあるが、それだけでは想像しにくいいため、検討していただきたい。

(事務局)

他都市の情報などを収集しながら検討をしている。プライバシーの問題があるのと、掲載された情報がすぐ削除されるようなシステムになっている場合でも、スクリーンショット等により情報が残るなど、詳細情報を掲載することにはメリット・デメリットがあるようだ。引き続き情報収集しながら検討していきたい。

(山崎議長)

他に意見はないか。

それでは、この度新しく就任した委員に、現在の活動状況を踏まえて意見をいただきたい。宮城県看護協会の赤間委員、お願いします。

(赤間委員)

宮城県看護協会の赤間です。コロナウイルス感染症の影響で研修や会議が実施できない状況だったが、8月に入り少しづつ開始している。宮城県看護協会では看護職員認知症対応力向上研修を仙台市から委託を受けて実施している。今年度、4回計画しているが、先日8月にやっと1回目を終了した。募集人数を150名で計画していたが、60名前後に絞って開催せざるを得ない状況であり、実施にあたっては広い会場の確保などが難しく、例年通りにはいかない状況である。また今年度より、高齢者施設の看護職へ認知症の知識を持ってもらうため、認知症の認定看護師の派遣事業を始めた。10数か所から派遣依頼があり、認知症関連施設からは3施設から依頼があった。できる限り派遣を実現させていきたい。また、訪問看護ステーションを県内に6か所、サテライトも含めて10か所開設し、訪問看護を実施している。その中で1割強くらいで認知症の方に訪問しているが、独居や高齢者世帯など、受け入れが難しい方もいる。今年は猛暑だったので、水分が摂れずに台所で倒れているなど、命に係わる状況が見受けられる。受け入れが難しい状況であっても、根気強く見守りを続け、命をつなぐための訪問を実施していく。

(山崎議長)

それでは、仙台市地域包括支援センター連絡協議会の芦名委員、お願いします。

(芦名委員)

地域包括支援センター連絡協議会の芦名です。地域包括支援センター連絡協議会からは、コロナ禍における地域包括支援センターの活動について、報告する。地域包括支援センターは仙台市から委託を受け、概ね中学校区に1か所、市内52か所に設置されている。コロナ禍の中、高齢者の総合相談機関として感染予防に考慮しながら原則、利用者に支障がない限りは電話での相談対応をしている。しかし、新規の相談者や、虐待などの緊急対応では、どうしても細やかなアセスメントが必要になり、自宅を訪問せざるを得ない。包括職員は感染リスクを抱え、自らが媒体とならないように不安の中活動していた。また外出自粛により、地域で開催していた介護予防教室や介護予防自主グルー

ブの活動、認知症カフェやサロンなどが軒並み中止となり、行き場がなくなった高齢者の身体機能の低下や認知症高齢者の相談増加など、高齢者の状況に大きく影響が出ている。事務局からの報告にもあったが、認知症ケアパスの配布について、これまでも地域のコンビニや生協、大手スーパーや郵便局などの金融機関、医療機関などに設置協力いただいていたが、認知症の相談が増えていることもあり、再度配布・協力依頼に周っている。また、コロナを悪用した詐欺など消費者被害も発生しているため、警察や宅配業者との連携も図っている。

相談については、家族からの相談が増加しており、コロナ影響による生活機能の低下による相談や認知症発症や進行に関する相談が増加傾向にある。地域住民から集いの場の再開について相談を受けることも多く、地域交流の重要性を改めて認識している。認知症カフェなどで、認知症サポーターや認知症当事者の活躍の場の創出に取り組んでいた地域包括支援センターも多かったが、コロナ禍の中、活動は難しい状況である。今後も地域包括支援センターに求められる役割は大きなものだと思っており、認知症になっても変わらず安心して生活できる地域であるよう、今後も取り組んでいきたい。

(山崎議長)

仙台市医師会の清治委員、お願いします。

(清治委員)

仙台市医師会の清治です。仙台市医師会では7月に10年務められた永井幸夫会長に変わり、安藤健二郎新会長が就任している。それに伴い、認知症対策推進会議も前任の浅沼先生に代わり、交代になっている。よろしくお願ひしたい。もし、医者がボトルネックになって、事業が進まないなど、そういったことがあれば、仙台市医師会にご意見をいただきたい。安藤会長もより良い取組みをやっていこうと思っているので、是非ご意見いただければと思う。目下コロナ禍の中、仙台市医師会としては施設での流行について危機感を持っており、何か対応できることはあるのかということも議論している。

私自身は鶴ヶ谷でひかりクリニックという訪問診療のクリニックを開業している。医者2人、看護師2人、それから事務員3人という、それほど大きなところではないが、宮城野区、泉区あたりで160名程を診察している。グループホームなども担当しているので、おそらくその半分ぐらいが認知症に係る方々かと思っている。何というか、訪問診療の依頼がくる時点で、家から出たくないとか、病院には行きたくないとか、あるいは風呂に入りたくないとか、介護ベッドは必要ないんだとか、自分なりの心地良さみたいなものがある方が多い。そういう方に、いわゆる標準的な介護というものがどれほど必要なのか、あるいはその方の価値観とか、その人らしさみたいなものを大事にするといったところに関しては、自分としても葛藤しながら診察している。

それからもう一つ、産業医として企業を回っており、企業の中でも高齢化が進んでいると感じる。最近ではエイジフレンドリーといって、高齢者に優しくしよう、職域で優しくしようという話も出てきている。産業医として若年性認知症の疑いの相談を受けることも少なくないが、コロナ流行前は有効求人倍率もかなり高く、認知症が心配な方も

何とか使ってくださいと言えたが、コロナで企業の業績も下振れてくると、なかなか企業も対応しづらくなるのかと感じており、危機感を抱いている。

皆様といろいろな問題の解決について検討していきたい。

(山崎議長)

みやぎ小規模多機能型居宅介護連絡会の福井委員、お願いする。

(福井委員)

一昨年から、仙台市と改めて小規模多機能の情報交換会を実施していく取り組みをしており、各区分れて、より良い小規模多機能の在り方、困りごとなどを共有していこうと進めていたが、このコロナ禍で実施できていない。ただ、こういった情報交換会は必要であり、今後の在り方を模索していきたい。我々、地域密着型サービスと分類されているグループホームとか小規模デイには、運営推進会議が設置されているが、例えば地域包括支援センターが出れないとか、町内会長も来ないとか、そういった理由で会議が開催できない。各地域での会議の開催について、仙台市からはっきりとした指針を出してもらえると運営上助かる。

私自身は未来企画という会社で、若林区荒井で医療介護系の事業を行っている。複合的にアンダンチという事業をやっており、多世代間交流を促して、地域の理解をいただけるよう、活動している。認知症の方も、いろいろな役割や社会とのつながりがあることで非常に生き生きとされるので、役割や社会性といったものをどんどん増やしていきたい。9月からアンダンチ内の飲食店を弊社で運営できる形が整ったので、入居の認知症高齢者や障害の就労支援もやっているのも、そのメンバーも働くといったインクルーシブな働く場を作っていきたいと考えている。

(山崎議長)

仙台市老人福祉施設協議会の戸次委員、お願いする。

(戸次委員)

仙台市老人福祉施設協議会で施設推進委員会の委員長を務めている、戸次です。前委員長である水澤の後任でこの会議に出席させていただくこととなった。仙台市老人福祉施設協議会の施設推進委員会は、昨年度から特養部会と軽費ケアハウス部会に分かれて活動している。特養部会では入所を申し込まれている方々が、今どのように過ごされているのか、すぐに入所の意向があるのか、そうではないのか、すでにどこかの施設に入所されているのか、また、本人の状態が悪化して特養に入居できなくなっているケースもあり、その実態把握を進めている。しかし、返信がなかったり、まったく連絡がとれずに音信不通の方も随分と増えている。そこで各施設が適正に待機者名簿の管理を行える一定のルール作りが急務と考え、仙台市の介護事業支援課から指導を受けて取り組みを進めている。一方、軽費ケアハウスは市内に17施設あるが、日常生活支援に係る部分で様々な課題を抱えている。特に苦慮しているのは、利用者の重度化増、それから認知症の出現・進行である。認知症の利用者への個別ケアだけでは解決に至らず、一緒に生活している自立した高齢者の理解がないと、上手くいかない状況である。地域におけ

る認知症施策の推進の考え方と同じように、施設の中でも認知症の高齢者と自立した高齢者が共生できる環境や、ケアが求められている。

私は仙台白百合会という社会福祉法人に所属している。今回、仙台市の認知症対策事業の実績にしっかりと目を通す機会をいただき、感謝する。それに対して、当法人が社会福祉法人としてどれだけ関わることができているかについて話をしたい。現在、職員の内 5 名がキャラバン・メイト養成講座を修了しており、小学校や一般企業で認知症サポーター養成講座を開催している。また、近隣町内や地域包括支援センターなど、ここ数年で 30 以上の認知症カフェやサロンでの講話や意見交換会への出席などの機会をいただいております、地域との関わりをもつ大変良い機会と考えている。それから研修事業では、認知症介護研修に継続して出席している。現在、認知症介護実践者研修の修了者は法人全体で 40 名になり、実践リーダー研修修了者も 15 名となった。高齢者施設で働く職員にとって、介護と同様、認知症に対する知識や技術は必要不可欠であり、認知症の研修事業が継続的に確実に実施されていることに、感謝する。

これから仙台市が推進する認知症施策について学びを深め、現場にフィードバックするとともに、現場の声をここで発信できればと思っている。

5 報告

仙台市認知症疾患医療センター事業について

【会議冒頭で確認された通り、非公開とする】

6 その他

(山崎議長)

仙台市高齢者保健福祉計画介護保険事業計画策定に関わるアンケートについて、事務局より説明いただきたい。

(事務局)

本日配布させていただいたアンケート用紙について、案内をさせていただく。本市では「仙台市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」を策定し、高齢者保健福祉政策の充実と介護保険の円滑な運営に努めている。この計画は 3 年ごとに見直しを行うこととしており、現在の計画は平成 30 年度から令和 2 年度までを計画期間とした、第 7 期計画に基づいた政策を展開している。今年度は次期計画策定の時期であり、認知症対策推進会議に出席いただいている委員から、次期計画の認知症施策等について意見や要望をいただきたいと考えている。また、当会議委員である若生委員には、仙台市介護保険審議会委員として次期計画の策定に関与いただいている。若生委員より委員会の意見交換の様子や、提案いただいている内容等を報告いただきたい。

(若生委員)

認知症になっても希望をもって日常生活を過ごすということはとても大切なことで、それに関して認知症関連の計画を策定いただくことは有難い。その中で一つ、認知症の

方の社会参加について。私達は認知症になる前から普通に社会の一員として暮らしているが、認知症の方の社会参加とは、認知症になったときに改めて社会参加を唱えるべきだ、ということなのか。そうではなく、これまで続けてきた社会の一員としての暮らしを、認知症になっても続けられるようにしてほしいと思い、意見を伝えた。認知症になって改めて社会参加するのではなく、ずっと続けてきたその人の人生の中で、認知症になってもその社会に参加し続ける、それこそが大切だということをお話させていただいた。

7 閉会

(山崎議長)

他に委員からご報告等はないか。

委員の発言から、皆様も気づきがあったのではないかと思います。コロナのスティグマというのが少し問題になっており、これはコロナが未知のものだから。そこで考えてみると、精神障害のスティグマ、これもやはり未知だから。そして認知症も、実は未知の出来事ではないのかと思う。したがって、未知のことに対して、まずは当事者の話を聞くということから始めていくのが大切だろうなと思っている。

本日予定されていた議事は以上となる。